
冬将軍vsシベリア寒気団【シリーズ・白根美紅】

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬將軍vsシベリア寒気団【シリーズ・白根美紅】

【Nコード】

N9828Q

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

勘違いは誰にでもあることですが、勘違いをする理由にまで考えが及ぶ人間はそう多くはありません。

(前書き)

今年の冬は寒かった。うん寒かった。

「ねえお兄ちゃん、冬將軍とシベリア寒氣団ってどっちが強いの？」
珍しく妹のミク（本名：白根美紅）から質問が飛んできたかと思えばコレである。

兄は数秒間唾然とした後、テレビ画面から視線を外して背後に佇む妹へと移した。録り溜めてあったミルク ホームズを観るのは、また後日となりそうである。

「お前は何を言っているんだ？」

兄の表情は呆れというよりも、哀れみのような感情を色濃く浮かべている。まるでそう、世間の常識を改まって問われているかのような面持ちだ。見え過ぎてしまう妹の将来を案じてのことだろうか。「そんなの冬將軍に決まってるだろ」

「違った。ただの馬鹿兄妹だった。」

「……ホントに？」

ジトーと警戒感丸出しで眺めつつ、その回答への疑問を口にする。「お前、冬將軍舐めるなよ。素手で熊も冬眠させるほどの実力だぞ。シベリア寒氣団なんて徒党を組まないと何も出来ないヘタレの集まりじゃねえか。悔しかったら単独でウサギを冬眠させてみるってんだ」

つまるところ友達が居ないので他人とつるんでいる連中が嫌いな様子である。そしてそれはともかく、ウサギを冬眠させるのは冬將軍にも出来ない芸当である。

「うん、シベリア寒氣団の方が強いんだね。わかったよ」

「待てコラ」

説明の甲斐もなく、というより説明自体がアレな感じではあったのだが、とにかくミクの中では結論が出たようである。もちろん、兄として納得の出来る回答でないことは言うまでもない。

「その結論に至った理由を述べよ」

「だってお兄ちゃん、嘘ばかり言うじゃない」

的確かつ賢明な判断である。しかし当然ながら、兄としては看過出来ない非常事態だ。騙すにしてもからかうにしても、ある程度の信用があるからこそ成立するものである。それがなくなってしまうということは、数少ない楽しみの一つが失われてしまうことと同義であろう。

「ミクよ、ちょっとここに座りなさい」

正座で座り直して姿勢を正すした兄が、目の前の床をトントンと叩いて正対を促す。

「また？」

「またと言わない」

「はいはい」

おざなりな返事をしつつも、ミクは意外にも素直に応じて兄と正対する。それは別に兄という存在に対して思慕を抱いていたからでは全くなく、兄は社会的に可哀想な人間なのだから邪険にしては駄目だと母から言われていたためである。

現実というのは悲哀に満ちているものだ。

「で、何？」

「まずは問題に答えてみる。もちろん真剣に、正直にな」

「問題？」

「そう難しいものじゃない。友達にリンちゃんっているだろ」

「うん、いるけど」

今でも時折遊んでいるご近所の友人である。双子の弟がいて、小さい頃は兄も含めた四人でよく遊んだものだ。今となっては遠く儂い思い出である。ミク個人としては、どうしてこうなったのかと問わずにはいられない。

「彼女が二階の自室でベッドに寝そべっていたところ、突然大きな揺れが襲いました。その瞬間、彼女の脳裏をよぎったものは以下の三つ

一つ、鍵付き引き出しの奥に仕舞いこんである、ムシヤクシヤした

時に書き溜めた恥ずかしいポエム集。

二つ、まだ途中までしか読んでいない未完結の長編漫画約百巻。

三つ、ここ数ヶ月コツコツ集めてきたヤオイ画像—G分」

兄はピンと人差し指を立て、気味が悪いほどの笑顔で問う。

「さあ、この後リンちゃんはどうしたでしょう？」

「うーん……」

ミクは悩む。その様は真剣そのものだ。

「ポエムは鍵付きの引き出しだから、とりあえず心配しないでおくとして、ヤオイ画像はパソコンを立ち上げなければならぬものだから簡単には持って出られないでしょ。そうなると漫画だけど、さすがに百冊は無理だよな。まだ読んでないヤツだけ持って出れば減らせるかな。でも半分くらいしか読んでなかったらそれでも大変だろうし……そもそも、もし机が壊れて鍵の意味がなくなっちゃったらポエムも大変だし、パソコン自体が壊れたらヤオイ画像も失われちゃうワケでしょ。それともUSBメモリに移してあったりするのかな。リンちゃんって結構大雑把なところあるから、そういう慎重なことしそうにないんだよな。というか」

ミクは正面でニヤニヤしている兄をキツと睨み付ける。

「これってちゃんと答えあるの？」

どれを選んでどれかは犠牲になる。しかもどれ一つとっても、明確に重要な代物でもない。まして兄の出している問題である。意地悪な引っかけがないと思えるのも無理からぬ話だ。

「答えという意味なら、ないね」

「じゃあ何のためにやらせたのっ」

「受け答えから、わかることがあるからさ」

「わかること？」

「先入観だよ」

ニヤリと笑い、言葉を続ける。

「お前が先入観に振り回されているということが、これでよくわかった」

「何ですよ。どーいうこと？」

「俺の出した問題に、お前は何一つ疑問を持たなかった。揺れた時に頭をよぎっただけであって、リンちゃんもそれらの物体を所持しているとは言っていない。そもそも、彼女がそんなイメージダウンアイテムの数々を持っているハズが」

「え、持ってるけど」

兄の言葉が止まる。

「持ってるよ、多分全部」

「マジで？」

「ポエムはこっさり読んだことあるし、本棚に漫画がびっしり並んでるし、ヤオイ画像は見たことないけど、同人誌なら発見したことあるよ」

「……まあ、その件に関しては後ほど改めて検証するとして、この三種のアイテムをミクよ、お前はどうしようと思っただけ？」

「どうしようって、持ち出すんでしょ？」

「どうして？」

「どうしてって、地震が起きたから」

「俺は確かに『揺れた』とは言ったが、それが地震だったなどとは一言も言っていない。仮に百歩譲って地震だったとしても、その規模が大きいかどうかもわからない。お前は少し揺れた程度で、部屋に隠してある恥ずかしアイテムを外へ持ち出すのか？」

恥ずかしい質問に、ミクの眉根がキュッと引き寄せられる。

「そりゃあ小さい地震なら持ち出したりしないけどさ……というか、恥ずかしアイテムなんて持ってないしっ」

「まあそれに関しては後で搜索するとして」

「するなっ！」

「いずれにせよ、これでわかっただろ。お前は先入観に縛られ、曇った眼でこの兄を見ている。俺は確かに嘘を吐く。だが嘘なんて誰でも吐くものだ。だがお前は、俺が常に嘘を吐いているという先入観で見ている。それがどれほど失礼なことなのか、これでわかった

だろう」

「お兄ちゃんのはただの屁理屈じゃない」

ミクの表情は納得顔には程遠い。

「……よしわかった。今度はそこに立ってみる」

「そこって、鏡の前？」

「そう、鏡の前だ」

部屋の隅にある大きな姿見の前に立ち、ミクは不審な表情を兄へと振り向かせる。

「立っただけど？」

「今何が映っている？」

「何がって、私が映ってるに決まってるでしょ」

「よし、右手を持ち上げてみる」

不服そうな顔をしながらも、それでも素直に従って右手を持ち上げる。トレーナーの袖が肘まで落ち、手首が外気に晒された。寒風の吹きすさぶ室外ほどではないが、それでも窓際の冷気が露出した手首を舐める。

「こんなことして何になるの？」

行為の真意が見えないこともあり、彼女の言葉に宿る棘も一段と鋭く感じられる。

「鏡の中のお前は手を挙げているか？」

「当たり前でしょ」

「どっちを挙げてる？」

「左手に決まってるじゃない」

「そうか。頭はどっちにある？」

「どっちって……正面？」

「聞き方が悪かったな。鏡に映ったお前は左右が入れ替わっているんだよな？」

「うん」

「なら上下はどうだ？ 入れ替わっているか？」

兄の質問に、ミクは一瞬何を聞かれたのかわからないとばかりに

小首を傾げた後、薄い氷の上を踏み締めるような慎重な面持ちで応じる。

「上は上、下は下でしょ。入れ替わってなんかいないよ」

「よしよし、それじゃあ今度は」

言いつつ近くにあったテーブルを引きずってくる。

「このテーブルに横になって鏡を見てみる」

「え、何で？」

「いいから」

何をしようとしているのかわからないまま、妙にニヤけている兄を警戒しつつテーブルに寝そべる。テーブルの上に横になって鏡に映るといふ非日常は、あまりにも奇妙な感慨を伴って彼女の視界へ飛び込んできた。

「その体勢のまま左手を上には伸ばしてみる」

「え、うん」

言われるままに左手を天井に向けて伸ばすと、鏡に映る自分の姿も同じように手を伸ばす。

「鏡の中の自分はどっちの手を伸ばしている？」

「だから右手だって」

「頭と足は入れ替わっているか？」

「入れ替わってるワケないでしょ」

「それはおかしいな」

「何がよっ」

さすがに痺れを切らせたのか、ミクの語調が荒くなる。しかしそんな様子に慌てる素振りも見せず、テーブルを回り込んでミクの背後へと立った彼は、同じ鏡に映り込んだ。

「ホレ、俺から見るとお前は手を『上』に挙げているし、頭と足は

『左右』に伸びているぞ？」

「え？」

言われてミクは混乱する。確かに彼女の左手は上に伸びている。しかしそれは彼女にとって確かに右手であり、左右は入れ替わって

いると感じられる。同時に頭と足は上下をそのまま保っているように見えるのに、それが入れ替わるという状況が全く理解することが出来ない。

「え、あれ？」

「もういいだろ。とりあえずテーブルから降りろ」

「あ、うん……」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべたまま、彼女は床へ足を下ろす。

「いいかミク」

間髪を入れず、兄が口火を切った。

「鏡っていうのは左右が入れ替わる代物じゃない。上にあるのが上に下にあるのが下に映るように、右にあるものは鏡の右側に左にあるものは鏡の左側に映っているだけなんだ。それを左右が入れ替わったと感じるのは、主観を鏡に映る自分に投影した際に生ずる違和感を強引に正当化したものに過ぎない」

「えっと、つまりどういうこと？」

「鏡に映った自分は左右が入れ替わってなどいない。左右が入れ替わったと思っただけなんだから話だ。お前が横になって鏡を見た時に混乱したのは、そういつた先入観が無意識に働いているせいだ。お前はもつと正直に、ありのままの姿を受け入れる努力をすべきなんだと、お兄ちゃんは思う」

腕を組み、うむうむと頷いている兄の姿は、一見するとまともそうに見えるくもない。

「……あのさ、お兄ちゃん」

「何だ、妹よ」

「冷凍庫にあったハズの雪見大福がなくなっているんだけど、知らない？」

「それならさつき冬将軍が食べてたゾ」

刹那、ミクの飛び膝蹴りが顔面に決まった。

先入観というのは、それ自体が悪なのではない。それはパターン

を読み、未来を予測し、より効率的な判断を手際良く済ませるために生み出された知恵の一つである。事実、ある程度の知能がなければ先入観を持つことはないし勘違いも存在しない。問題は、その使い方が拙いというだけの話なのだ。

「もう二度と信じないからっ」

プリプリ怒りながら、鼻血を流して倒れている兄を尻目に部屋を後にする。先入観というのは大抵の場合当たっているものだが、これはその典型例の一つと言えるだろう。

人間、おかしな先入観を持たれないような普段の行動こそが肝要である。

(後書き)

コンピュータが間違わないのは、コンピュータに先入観がないから
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9828q/>

冬将軍vsシベリア寒気団【シリーズ・白根美紅】

2011年2月17日14時56分発行